第45号
2022年8月1日発行

かながわ 助産師職能だより

公益社団法人神奈川県看護協会 助産師職能委員会　発行責任者　布施 明美
〒231-0037 横浜市中区富士見町3-1　TEL：045(263)2901　FAX：045(263)2905
E-mail kanakan1@basil.ocn.ne.jp　URL https://www.kana-kango.or.jp

ごあいさつ

助産師職能委員長
布施 明美

盛夏の候、会員の皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

平素、皆様には当委員会の運営にご協力とご理解を賜り心より感謝申し上げます。

今年度２期目の委員長に就任いたしました布施明美でございます。

微力ではございますが、神奈川県の周産期医療の質向上、母親と家族が安心できる妊娠中から子育てへの切れ目のない支援に向けて尽力する所存でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて令和４年度日本看護協会通常総会が６月８・９日幕張メッセにてハイブリッド形式で開催されました。

福井会長より「新型コロナ感染症は２年を経過した今も変異しながら世界で感染拡大を繰り返しており、社会は人々のいのち・健康の保護と経済活動の維持・発展をいかに両立するかという課題に向き合っています。このような危機的状況において、医療・看護へのニーズはますます高まっています。大きく広がる看護の期待に応え人々の命と暮らしを守るプロフェッショナルとしての自立と力を看護に実装してまいりましょう」と挨拶から始まりました。令和４年度の重点課題の一つに全世代の健康を支える看護機能の強化として、①周産期における助産師の業務内容・働き方の明確化、今後の方策の検討 ②院内助産・助産師外来の推進の強化 ③女性とその家族への支援に必要な体制の検討が示されました。

また２日目の全国助産師交流会では「時代の要請にこたえた実践を届けるためにはどうあるべきか」をテーマに３名のシンポジストの発表がありました。新型コロナ感染症拡大による社会の変化は妊産褥婦新生児及びその家族に大きく影響し、助産師の専門的な支援が必要とされます。助産師の活動の場は多様性に満ちており、助産師だからできるケアを発信し、県内で働く助産師がそれぞれの場所で役割発揮し輝けるよう助産師職能委員10名で課題に取り組んでいく所存でございます。

最後に、助産師活動推進に向け皆様の当委員会への活動ご参加をご期待申し上げます。

2022年度　助産師職能委員紹介

助産師職能委員長	布施 明美	会　計	小保方 加奈子
副委員長	平林 奈苗		土井 秀子
書　記	関口 保子		中村 綾美
	千葉 菜緒		諏訪 和美
	関口 美鈴	広　報	岩田 光代

*** 2022 年度 ***
助産師職能研修予定
（敬称略）

助産師職能委員会・講演会
「授乳支援」

開催日◆ 2022 年 7 月 22 日

講　師◆ みやした助産院　宮下 美代子

磨こう！分娩介助！

開催日◆ 2023 年 1 月 20 日

講　師◆ ウパウパハウス岡本助産院　岡本 登美子

CTG 判読と母体感染のリスクと対応

開催日◆ 2022 年 10 月 21 日

講　師◆ 神奈川県立こども医療センター副院長産婦人科部長
石川 浩史

周産期メンタルヘルス

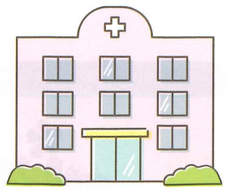
開催日◆ 2023 年 2 月 10 日

講　師◆ 済生会横浜市東部病院　相川 裕理

公益社団法人神奈川県助産師会 共済研修
「産後ケア」

開催日◆ 2022 年 11 月 25 日

講　師◆ かもめ助産院　鈴木 令佳



*** 2021 年度 ***
助産師職能委員会 活動及び研修会 報告

2021 年	7月21日(水)	職能委員会・職能集会 講演会「今さら聞けない分娩介助技術」 ◆ 山本助産院 院長　山本 詩子
	8月27日(金)	職能委員会
	9月24日(金)	職能委員会
	10月22日(金)	職能委員会 研修会「CTG 判読と母体感染のリスクと対応」 ◆ 神奈川県立こども医療センター 副院長 産婦人科部長　石川 浩史
	11月19日(金)	職能委員会 研修会「思春期の性教育」 ◆ Marimo 助産院 院長　中島 清美
	12月24日(金)	職能委員会
2022 年	1月21日(金)	職能委員会 研修会「生殖・不妊治療」 ◆ メディカルパーク横浜 院長　菊池 盤
	2月21日(月)	職能委員会 研修会「周産期メンタルヘルス　―WITH コロナの育児支援―」 ◆ 北里大学看護学部看護学科生涯発達看護学 生涯発達看護学Ⅰ 准教授　新井 陽子
	3月25日(金)	職能委員会
	4月22日(金)	職能委員会
	5月27日(金)	職能委員会
	6月24日(金)	職能委員会

Voice1 今さら聞けない分娩介助技術

牧田総合病院◆永井 玲衣

私は助産師としてどのようなケアが安産へと導き、どのように産婦さんに寄り添うことで不安を軽減することができるのか。さまざまな分娩介助に携わるなかで考えて実践し、振り返ることを行ってきました。そのため、今回の研修を受けることで分娩介助の手技やケア・知識などを日々の業務に還元したいと思い参加しました。

研修では解剖学から分娩をとらえることで、正しい知識を得ることができました。児頭が下降し、排臨・発露まで進行すると、腰痛を訴えて身体をのけ反らせ顎があがる産婦さんがいます。私はそのような産婦さんへ顎を引き、お尻をつけてもらうような声掛けを行ってきました。しかし、身体がのけ反ることは児頭が母体の仙骨部を圧迫することで起こる、解剖学的には自然の反応であり無理に顎を引いてお尻をつけるよう促すことはする必要はなく、お尻をあげて怒責をかけてみるほうが産婦さんにとってはいきみやすいということを学びました。

また、分娩中の必要以上の声掛け・励ましは大脳皮質を活性化させアドレナリンの分泌を増加し、オキシトシンの作用を弱めてしまう恐れがあるということを知りました。その時々に応じての声掛けは必要ですが、囁くように沈黙を上手く使っていくことも重要であるということを学びました。指導や声掛けなど、つい声や手が出がちになることがあります。しかし、目や手や心を離さずに見守ることもひとつのケアになるということを知ることができました。産婦さんの産む力を引き出すための関わりや出産の環境作りを整えていくことの大切さを感じました。

出産はプライベートでセクシャリティな空間であり、かつ究極の排泄でもあるため見守り寄り添うことの重要さを学びました。そのうえで、医療者として安全のためにどこで手を出すのかを見極めることが必要であるということ、正常を判断できる能力が求められることを再確認しました。今回学んだ技術や知識を生かして、これからも安全で安心できる出産が行えるよう努めていきたいと思います。

Voice2 ＣＴＧ判読と母体感染のリスクと対応

小田原市立病院 助産師◆久保寺 春菜

助産師２年目になり分娩に携わる機会が増え、今回改めて自身の CTG 判読が適切であるかどうか、基礎から学びたいと思い研修に参加しました。

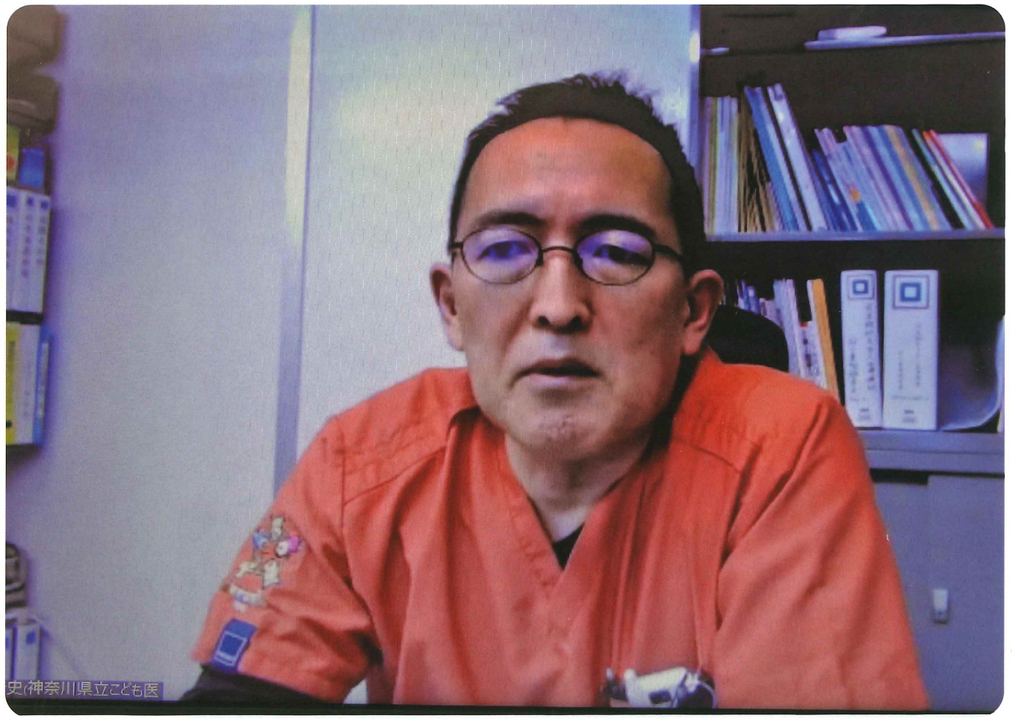
研修を受ける上で、私が一番楽しみにしていたのは参加型の研修だということです。研修の資料には、症例毎に問いが設けられ、受講者はその答えをスマートフォンから QR コードを読みとり回答する仕組みでした。回答はすぐに集計され、他の受講者がどういったアセスメントしているのか、アセスメントする上で悩んだことなどがリアルタイムで示されるため自分とは違う意見が見え、とても勉強になりました。

今回の講義で、印象に残っている学びが２つありました。１つ目は、健康な胎児が低酸素にさらされた時の最初の反応は“基線細変動の増加＋基線の低下”であることです。普段、“基線細変動の減少”に対し、胎児の低酸素を疑いながらモニターを継続し慎重に観察をしてきました。しかし、“基線細変動が増加”しているモニターに対し、重きを置いていなかったため驚きました。今後、基線細変動の増加を見たときは、基線と併せて注意していこうと思いました。また、臍帯静脈の圧迫が起きると CTG 波形は徐脈を示すとだけ思っていました。

しかし子宮収縮と共に起きる頻脈も同じく臍帯静脈の圧迫によって起きるという事を学び、注力しなければならないと思いました。

２つ目は、GAS 感染症疑いの妊産婦の初期対応の重要性についてです。講義では母児が助かった事例・助からなかった事例を比較し、スマホを用いてどこがよかったかを受講者でディスカッションしました。その結果、同じ疾患であっても初期の段階で感染を疑い、対応するか否かで母児の予後が変わってくることの重要性を痛感しました。

今回の学びを活かして、安全なお産ができるよう今後も自分の知識を研鑽していきたいです。



Voice 3 思春期の性教育

前田産婦人科 助産師◆大塚 桜子

第１子が生後７ヶ月となり、産休・育休中に性教育をはじめ様々な講座を受講する機会がありました。友人からの依頼で中学１年生への性教育の授業を担当する機会をいただいていることや、通っている剣道場で親子向けに命の話をする機会があり、また自身がどのように我が子に命の大切さや性について伝えていけるかを考える中で対象に合わせて伝えるべきことや、助産師として自分自身が伝えたいことを深めたいと思い、今回の講座を受講しました。他国では日本よりも早い時期にコンドームの使用方法など具体的な避妊方法も含めた内容で性教育が行われていると聞きますが、日本では授業のカリキュラムで制限がかかることも多くある中で、事前打ち合わせの重要性や、導入時のポイントについての内容が、特に学びになりました。また、同じ講師が継続して性教育を行うことで、ライフステージに合わせて「生と性」を切れ目なく伝えることができること、対象の変化や成長を教員や家族と一緒に感じ共有できるということを体験談を交えてお話いただき、とても興味深かったです。講座を受けたあとに、家族と一緒に「生と性」について話す機会にもつながることで、良い連鎖を生むことにつながるのではないかと思います。

今回の講座はZoomで開催されましたが、これはコロナ禍のひとつの産物であると感じています。感染が懸念される中、オンライン開催であれば世界中のどこからでも講座に参加し、会話ができるのはとても大きなメリットだと感じます。育児中に様々な講座に参加ができたのもオンラインが発展したおかげです。リアルとオンラインのどちらの良さも有効活用できる時代に、驚きと喜びを感じています。

今回の講座や妊娠・出産・育児を実際に体験したことも、今後の性教育に生かしていけたらと思います。

最後に講師をしていただいた中島先生はじめ、主催いただいたスタッフの皆様に感謝申し上げます。

Voice 4 生殖・不妊治療

済生会横浜市東部病院◆山内 彩華

私は今回不妊治療の研修に参加しました。不妊治療については働く中で勉強を重ねてきましたが、今回の研修内で着目されていた卵子凍結については、私の勤める病院でも始まったことや、医療関係でない友人から「卵子凍結をしようと思っている」と相談を受けていたため、かなりタイムリーな話題で興味深かったです。友人からの「卵子提供とか精子提供は臓器売買にはならないのか？」というたわいも無い会話の中から生まれた疑問に私も答えることができずもどかしくも感じていました。今回、私が研修を受けて第一に思ったのは、卵子凍結や卵子提供は今後世界的にも拡大していく中で臓器売買なのではないかと考える人もいるということ、凍結した時期・年齢によって卵子や精子に値段がつく、つまり、卵子の価値と人の価値が混同してしまわないのかという不安でした。倫理的な部分は講師の先生も流動的だと仰っていたため、今後世間の考え方も時代とともに変化していくのだと思います。性に携わる医療者として自分の信念はしっかり保ちつつ、一個人の考え方を受け止められるようにしたいと感じました。

また、卵子凍結を福利厚生としている会社が存在することは初めて知ったので、大変驚きました。確かに、妊娠、出産と出世の時期は被っており、毎日の通院や治療が必要な不妊治療は女性にとって負担が大きく、社会がどこまで理解してくれるかが大切だと思います。そして、社会に理解を求めるには教育も欠かせないと改めて感じました。私は毎年母校で性教育の授業の手伝いをしているのですが、専ら避妊法や若年妊娠のリスクについての内容ばかりで、中高生に性に対して後ろめたさや面倒といったマイナスのイメージを植え付けてしまっているなと感じています。今後は、女性が社会の中で自身のライフプランを全うするためにどのような仕組みや方法があるのか、というプラスで実用的な面についても伝えていきたいと感じました。

Voice 5 周産期メンタルヘルス ―WITH コロナの育児支援―

横浜市立大学附属市民総合医療センター 助産師◆鈴木 希美

この２年間、何が正しいのか分からず手探りで過ごした日々の関わりを振り返りたいと思い、本研修に参加しました。

助産師として勤務し 10 年以上経過しています。近年、赤ちゃんを授かり喜びと共に妊娠期を過ごす妊婦が減っていると感じていました。また講義でもありましたが、インターネットからの様々な情報収集により、自分の未来に起こるか分からない悪い情報から不安を増強させている人が増えていると感じました。COVID-19 が流行し不確実で、様々な情報が日々追加され、妊産・褥婦を取り巻く環境は大きく変化しています。

COVID-19 第１波の時、当院では状態が落ち着いている妊婦の健診は間隔をあけての通院を許可していました。来院する事での感染リスクを不安視する人が多く、その事による混乱は少なかったです。しかし第２波、第３波と株が変化し、家庭内感染者や死者数が増加すると「家が不安」と感じ入院希望者が増えました。その後は立ち合い分娩や面会の行動制限、ワクチン接種による副作用や胎児への影響などの不安、そして COVID-19 感染者は緊急手術後母子分離で児と会えない寂しさなど、感染が長期化する中で不安要因は多種多様になりました。当院でも産後 EPDS を使用していますが、高得点者と 10 番の質問に点数が付いた人は医師の診察を受け、地域介入を提案しています。私は EPDS で点数が付いた項目から不安なのか鬱なのか、アセスメントできる事を知りませんでした。そして、育児状況や日常生活の様子を踏まえながら点数を付けた理由を聞く事は個別性のある関わりとなり、支援の方向性が見えてくる可能性があったのに今まで私はそれを行えていませんでした。不安をすべて取り除くことはできませんが、今後は EPDS を元にコミュニケーションを図り、できている事も一緒に確認して自信につながる関わりを心がけていきたいと思いました。

COVID-19 は生殖可能年齢の女性に大きな影響を及ぼしています。母親なら子ども・胎児の心配するのは当然の事ですが、まずは母親が心身共に健康である事、またパートナーや地域、支援状況などの環境要因も大きく影響している事を学べました。

2021 年度　助産師職能委員紹介

助産師職能委員長	布施 明美	会　計	熊丸 真奈美
副委員長	平林 奈苗		土井 秀子
書　記	松原 里美		中村 綾美
	藤谷 直子		諏訪 和美
	関口 保子	広　報	岩田 光代

かながわ助産師職能だより
第45号　2022年8月1日発行

編集後記◆2021 年度助産師職能委員会が開催した事業のトピックスをまとめることができました。ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます